Copyrighted material
Yoshiro Kamitake

小林昇の方法態度と「大塚史学」(The Methodical Stance of Noboru Kobayashi and the 'Otsuka school' of Economic History)

神武庸四郎

〔注意：大会当日の報告はいくつかのトピックをスライドで重点的に紹介する形をとりますので、私の報告に関心をもたれ会場に来られる予定の方は前もって以下のレジュメに目を通しておいてください。〕

Ⅰ報告のねらい

日本では経済学という学問文化のなかで、なぜ学派とよべるような「教義継承的学者集団」ができないのか？この問いに対してはただちにつぎのような反論が提起されるかもしれない。たとえば「宇野学派」があり、「大塚史学」があるではないか、と。しかし、それらをケインズ学派やドイツ歴史派経済学（歴史学派）と同等のものとみなすことができるであろうか。また、ケンブリッジ学派やストックホルム学派などの大学名の付いた学派やオーストリア学派のように国名のついた学派は日本にあるだろうか。

こうした問題をひとまずたてたうえで、「学派」を論ずること自体に現在の立場から意味づけが可能であろうかという疑問をさりげなく提起してきた日本の代表的な経済学史家小林昇の方法態度の検討をこころみること、これが本報告のねらいである。ここではとくに「学派」としての「大塚史学」を材料にして、小林昇流の「暗示的な」メタ経済学的方法態度の「あぶりだし」をめざすこととする。二兎を追う課題設定だという批判もありうるだろうが、とりあえずはdouble - jointedness（[11]p.96）を想定した問題連結作業であると、私自身はかんがえている。

Ⅱ小林昇の方法態度

小林昇はまとまった方法論的（methodological）著述を残していない。彼はそうしたたぐいの論考を具体的な対象への分析的考察をぬいて展開することに意味をみとめていなかった。むしろ研究対象を見る視線や自己の研究姿勢と社会との関連づけをつうじて、つまり方法態度（methodical stance）として小林は方法論を展開したというべきかもしれない。彼の方法はいわばメタ経済学的な観察眼を含んでいるので、いろいろな「経済学」を「価値自由」に分析する

ラディカルな視座を提供している。(念のために付言しておくが、「価値自由」は、もちろん「価値の度外視」や「価値のたな上げ」を意味するのではなく、きわどい「価値」、とりわけ宗教的「価値」をも根源的に、その意味で「自由に」、批判する学問的いとなみを含んでいるので、ばあいによっては危険きわまりない立場ともなりうる。) 私は以下で小林の三つの方法態度を重視しようとおもう。とくにその根底には彼の熾烈な戦争体験の横たわっていることが注目されなくてはならない。

(1)「戦後デモクラシー」の相対化

小林昇は「戦後デモクラシー」あるいはいわゆる「戦後啓蒙」に懐疑的であった、といってよいであろう。この点は、「戦後啓蒙」の担い手のひとりに分類されていた丸山眞男がのちに「戦後民主主義」に幻滅し、学問への「復帰」の態度を鮮明にしたばあいの方法態度と共通する。そこには両者の「超国家主義」体験がある。しかし、両者には決定的な戦争体験上の差異があることも事実である。というのは、丸山は軍隊を体験したのみだが、小林は戦場を、しかも一兵率として死に場所をえらぶ自由もままならない極限状況（最底辺）を経験したからである。そこに「戦後デモクラシー」との著しい距離がある。

(2)「下から」の視線から「経済学の経済学」へ

小林昇は研究対象をラディカルに把捉するために、とりわけ困難な「下から」の視線を重視する。結果的に対象は立体化されるとともに拡がりをともなって捉えられる。ちょうど映画監督小津安二郎がカメラの**ローポジション**を重視したように、小林は対象のいろいろな側面や他の対象との関連を見過ごすことのないように「腰を低く」して対象を見つめるのである。そこに「下から見上げて権力を否定するという思想のパターン」([5]、38 頁）が構築されることになる。小津安二郎はローポジションから、映像の「まやかし」を観客に見せた。彼は映画をつうじて映像の「まやかし」を同時に映画化したのである（[10])。それは、「**映画の映画**」とでもいうべき映画制作の方法態度であった。同じような表現をつかえば、小林昇の経済学史研究の方法態度はまさしく一種の「**経済学の経済学**」と名づけられるかもしれない。いろいろな経済学の集合をつうじて経済学の「まやかし」をも描きだしているからである。しかし、小林は「経済学の経済学」という経済学の構築をめざしたわけではなく、その意味するところは方法態度としての「経済学の経済学」であるというほうが適当であろう。

(3) 東京大学に象徴される「学問的権威」の否定

小林は徹底的に権威を嫌う。軍隊の官僚的位階制から学問の世界における「東京大学」の「支配」にいたるまで、彼はそうした社会システムにたえず冷ややかな姿勢を崩さなかった。彼の「価値自由」な方法態度はとりわけこの方面で一貫している。小林の語っているように「いっさいのアウトリテートはわたく

しには厭うべきもの」([7]146 頁) なのであった。

Ⅲ小林昇の方法態度の読みかえ

小林昇の方法態度を私なりに読みかえてみよう。それは、ルーマンの用語法にならって一言で要約していえば、「観察の観察 (Beobachtung von Beobachtungen)」([12], S.119) である。たとえば、内田義彦の『作品としての社会科学』を「批評」するかたちで「社会科学者」内田を「観察する」小林昇の眼はまさしくこうしたメタ観察への彼の沈潜を裏づけている。しかし、小林の「批評」にとって前提となるのは、彼の表現をもちいれば、「**博読**」にもとづく広く深い教養である ([6]390 頁)。そこから生起する彼の「鑑識眼」は教養の広さゆえに深みを増し、ついには「経済学」をのりこえ、「社会科学」をも超えてしまう。彼にしたがえば、つまるところ、「経済学」は (その批判もふくめて) すぐれてヨーロッパ的な思想現象にほかならず、またとくにイギリスにはじまる「経済学」は「交換価値分析」 としての限界を多様なかたちで示すことになる。じっさいに、小林昇にとって、ステュアートもスミスも、そしてリストすらも究極的には畏敬や傾倒の対象ではなく、研究の対象として意味をもつものにすぎない。そこには彼の「冷ややかな」眼光が降り注がれ、「価値自由」な態度が終始つらぬかれている。(→**「博読」の拡張についての問題は当日パワーポイントのスライドで説明**)

Ⅳ「大塚史学」の主内容

マルクスとウェーバーの諸文献に披瀝されていると解釈されている理論内容と特定の史実集合との対応により構築された大塚久雄の理論図式と歴史叙述の総体は、たぶんに誇張されて喧伝された感が否めないけれども、かつて「理論経済史」とか「比較経済史」とかよばれていた。それはもっと一般的には「大塚史学」と名づけられている。彼の「株式会社発生史」の研究ならびにその必要におうじて構成された用語法 (「前期的資本」など) はきわめてすぐれた学問的な達成と見なされるが、彼による「ウェーバー学説」(被支配者層＝官僚制分析のない「ウェーバー」) と「マルクス学説」(プロレタリアのいない「マルクス」) との折衷 (「ウェーバーとマルクス」) には学問的に継承されるべき内容がとぼしい。そこに暗示された彼の「理論」は段階論的な順序構造をもつ狭い意味での用語法にすぎず、2 項対立関係を欠いた理論的「総合」以上に出るものではない (大塚の「方法」にかんする私の批評については[2]を参照)。さらに、大塚の「共同体論」はヨーロッパ個人主義の社会的基盤を考える上で一定の理論的意味をもつが、文化人類学的な視点の欠落はその致命的欠陥となっている。また、彼の「国民経済」論は「ウェーバーとマルクス」の視角ではなくデフォ

一・リスト的視角を暗示しているが、植民政策論や帝国経済論の原理的な欠落によって彼の議論は小林昇のリスト研究と切りむすんでこない（→この関連では、若くして死んだ赤羽裕の遺作が重要な手がかりをあたえているが、それについては機会をあらためて報告したい)。小林は大塚が「前期的資本」の概念やグラースの「市場圏」概念の解釈をつうじて「原始蓄積」過程の「正常」経路をイギリス経済史にそくして明らかにした点についてはこれを「比較土地制度史」の視角からの重要な学問的貢献と見なしているが、それはもとより大塚の個人研究者としての成果を小林の視角から捉えなおした結果であって、広義の理論家としての大塚に対する評価ではない。また、大塚が小林とおなじく福島大学の教員であったとしたら、こうした彼の研究成果はユニークな――この形容詞はしばしば「無視される対象」に適用される！――個人研究者の業績として評価されるにとどまったかもしれない。しかし、「比較」の方法にかんして大塚と小林との間の懸隔は著しい（→**パワーポイントのスライドで大会当日に説明**)。

Ⅴ「大塚史学」の「学派性」

いわゆる「大塚史学」は、かりにその「元祖」の個人研究者としてのすぐれた資質を認めたとしても、「学派」を形成しうるだけの理論内容をそなえたものとはいいがたい。それではなぜ、一定の期間にわたって日本の経済（史）学界のなかで「大塚史学」はあたかも「学派」のように機能したのであろうか。そこには全国の大学システムの支配オペレーターとしての「東大」が厳然と存在し、東大の「権威」あるいは「学閥(system of an academical cliquism)」がオペレーターとして作用していたと考えられる。じっさいに大塚の「学説」は主として「東大卒」研究者群の「布教」によって広められたのであった。このことは、いわゆる「宇野経済学」ないし「宇野学派」のばあいにもあてはまるが、マルクスが『資本論』で展開した冗長な叙述的理論を根本的に批判し「純化」した「宇野経済学」の普遍的な学説史的意義を考えるとき、そうした事態は宇野弘蔵のユニークな学問的業績にとってじつに不幸であった（→彼の影響は一橋大学の理論研究者にもおよんだが、この点もふくめて宇野の経済学的思考方法の特徴についてはべつの機会に論じてみたい)。他方、1992 年に「元祖」みずからが天皇から文化勲章を受けたことによって「大塚史学」の「権威」は「宇野学派」にくらべて一段と高められたかもしれないが、しかしその事実は大塚久雄の示唆した「戦後啓蒙」の立場が「天皇制」の容認、共和制の否定につながるものであることを社会的にはっきりと証明してしまった。

Ⅵ暫定的なまとめ

もとより、以上のようなまとめ方は小林昇の研究視角からはずれているかもしれない。なぜならば、小林はとりわけ「学派」の概念や「学派論」にもとづいて経済学史をえがこうとはしなかったからである。しかし、日本ではヨーロッパ的な意味における「経済学派」を構成しうるほどのユニークな学者類型（→ラディカルな教養人）がなぜ生まれてこないのか、学界のシステム構造に適合した「専門人」ばかりが生起するのはなぜなのか、といった問題群を「価値自由」なラディカリズムの立場から観察するうえで小林昇の方法態度は継承されるべき「学問文化遺産」であろう。そこにこそ、「学問的ドン・キホーテをも、感動を失った実証主義者や些末的理論家をも、この生涯のなかで見すぎてきた」小林昇の「現状把握」（[6]409 頁）を積極的に評価する出発点があたえられているようにおもわれる。彼が対決していたのは、いわば「価値隷属」的な、あるいは価値を「棚上げ」にしたオポチュニズムの立場であったのではなかろうか、というのが私の小林昇「思想」の解釈である。

とくに、小林の強調する「アカデミックな学問研究と時務の要請とのあいだ」にある「シュパンヌンク」（[6]409 頁）は「研究」の現時点における意味づけ可能性と深くかかわり、歴史の叙述者であることを自認する彼がつねに意識していた方法態度である。歴史ディレッタンティズムという意味での悪しき歴史主義に陥ることを小林はことのほか嫌っていたといってもよかろう。一例をあげると、彼は「投入と産出とにおいて生産者大衆が認識できるのは交換価値上のプラス・マイナスであって、たとえばエネルギーないしエントロピーの量に換算された物質のそれではない」（[6]99 頁）といった鋭い理論的暗示をいつも研究の「背後」に潜ませていた。一種の無常観さえ漂わせる彼の方法態度から、「博読」をつうじて視点を低く広く設定していく彼の研究姿勢から、経済学史の研究にたずさわる者の受け継ぐべき「遺産」はあまりにも大きい。

＜主要参考文献＞

[1]『大塚久雄著作集』第１巻（1969 年）、第 3 巻（1969 年）、岩波書店
[2]神武庸四郎「歴史学の構造と理念―大塚久雄から上原専禄へ―」（『一橋大学研究年報・経済学研究』２００１年第 43 号、所収）
[3]神武庸四郎『経済史入門―システム論からのアプローチ―』有斐閣、2006 年
[4]神武庸四郎「経済学史研究に社会科学的な意義はあるだろうか」（第 73 回全国大会『経済学史学会大会報告集』2009 年、所収）
[5]小林昇『帰還兵の散歩』未来社、1984 年
[6]『小林昇経済学史著作集』第ＸＩ巻、未来社、1989 年
[7]小林昇『経済学史春秋』未来社、2001 年

[8]小林昇『山までの街』八朔社、2002 年
[9] 竹本洋「小林昇の戦争体験と戦後非啓蒙のひとつの基点」(関西大学『経済学論究』第 62 巻第 2 号、2008 年 9 月、所収)
[10]吉田喜重『小津安二郎の反映画』岩波書店、1998 年。
[11] W. W. Leontief, *Essays in Economics: theories and theorizing*, 1976.
[12]N. Luhmann, *Die Wirtschaft der Gesellschaft*, 1988. (春日淳一訳『社会の経済』、文眞堂、1991 年)